



264 号
2021/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



台湾版学童擁護員：日本では「緑のおばさん」と呼んでいたが「学童擁護員」が正式名称のようだ。台湾にも同じような、ボランティア制度があって、子供を見守っていた。台湾の友人に聞いたら、現在はいないそうだ。印刷版では解りませんが、旗の色は華人の好きな赤です。（台湾台中市 2014年4月撮影 佐々木健之）

‘わんりい’ 2021年6月号の目次は20ページにあります

今月も、比較的によく使われる言葉です。

・➤・➤・➤・➤・➤・

ある農家にサルとネコがペットとして飼われていました。主人が出かけている時、おなかを空かせたサルは、暖炉の灰の中でクリがおいしそうに焼けているのを見つけました。食べたいけれど、クリは熱い灰の中に埋まっています、どうやって取り出すかが問題です。

そこへネコが鳴きながらやって来ました。ネコも灰の中のクリを見つけて、食べたくて思わずよだれを垂らしてしまいました。それを見ると、サルはネコに言いました：「ネコ君、君は生まれ付きの臆病者だから、あんな熱い灰の中のクリを拾うことなんて出来ないだろう？」そんな風に馬鹿に

されたネコが言いました：「あんな灰なんて平気だよ。熱くないよ。見ている！」

ネコは自分が臆病者でないことを証明しようと、頑張って熱い灰の中のクリを全部拾い出したので、両手にやけどを負ってしまい、折角のクリも食べられませんでした。その間に、サルはネコが拾ってくれたクリを全部食べてしまいました。

・➤・➤・➤・➤・➤・

言葉の意味：人に利用されて、力を出すが自分の得るものは何もないという意味。

使い方：煽てられて、火中の栗を拾うなんて、馬鹿げたことだ。

・➤・➤・➤・➤・➤・

このお話、サルやネコが登場して会話をしているので、出典は「戦国策」あたりかと思いましたが、全く違って、何と、もとはイソップのお話だそうです。ご存知でしたか？

もともと、イソップの原典には確認されていないのですが、17世紀フランスの詩人ラ・フォンテーヌが、イソップ物語を基にして書いたという物語詩で紹介しているのです。

そう言われてみれば、サルがネコを貶めて、ネコの自尊心を刺激して無理なことをやらせるなんて、ちょっとした皮肉を感じますね。中国で買った、他の四字成語の絵本では、主人が大鍋で焼いているクリを見て、食べたいけれど熱いから無理だというサルに、ネコが良いところを見せようと、熱いのを我慢して主人のすきを見て鍋の中のクリを取り出すというお話になっていました。場面の違いはありますが、相手を意識して、自分を大きく見せようと

することには変わりありません。

元々のお話は、他人に唆されて無謀なことをしてしまうのを諷める意味があるようですが、現在ではそれとは違う意味でよく使われます。問題山積の会社経営を任された経済人とか、難しい政局の調整に乗り出した政治家などが好んで、「敢えて火中の栗を拾う」と言います。世のため人のため、自分の損得を考えず、困難を承知で、失敗を恐れず挑戦する覚悟を表明するわけです。

しかし最近では、このようなセリフを聞くことも稀、ましてや覚悟して事に当たるリーダーも見かけなくなりました。将来のビジョンを語る政治家もいないし、国のことを考えて仕事をする官僚も少なくなりました。皆、上のものへの忖度ばかりで、国民は置いてきぼり。世の中全体が、目先のことに一喜一憂して将来を考える雰囲気はありません。20年後30年後の日本が心配です。

しかし最近では、このようなセリフを聞くことも稀、ましてや覚悟して事に当たるリーダーも見かけなくなりました。将来のビジョンを語る政治家もいないし、国のことを考えて仕事をする官僚も少なくなりました。皆、上のものへの忖度ばかりで、国民は置いてきぼり。世の中全体が、目先のことに一喜一憂して将来を考える雰囲気はありません。20年後30年後の日本が心配です。



挿絵：満柏画伯

劉邦の『大風の歌』と『鴻鵠の歌』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

宿敵こうう項羽を倒し再び天下を統一した劉邦りゅうほうは、共に戦った仲間や部下たちの推戴を受けて漢王朝初代皇帝に即位しました。その後、韓信かんしん、黥布げいふなど将来自分の脅威になりそうな武将を、謀反の罪にかこつけて次々と討ち果たし、生まれ故郷はいの沛（江蘇省徐州市）に凱旋しました。この時作った歌が『大風の歌』で、『史記』高祖本紀に採録されています。

[原詩]

dà fēng gē liú bāng
大 風 歌 劉 邦

dà fēng qǐ xī yún fēi yáng
大 風 起 兮 云 飛 揚
wēi jiā hǎi nèi xī guī gù xiāng
威 加 海 内 兮 歸 故 鄉
ān dé měng shì xī shǒu sì fāng
安 得 猛 士 兮 守 四 方

[訓読]

たいふう ひよう
大風起りて雲飛揚す
い かいだい
威は海内に加わりて故郷に帰る
いず もうし しほう
安くにか猛士を得て四方を守らしめん

[和訳]

大いなる風の起りて、雲飛び散れり
我が威光、全土に及び故郷に帰る
よきものふ武士を求め得て、
いかで四方を守らしめん

高祖劉邦には今一つ難題がありました。それは妻の呂后りよこう（呂雉りよち）の存在です。高祖は貧賤の頃、村の顔役だった呂公りよこうに人相と才能を認められ、娘の呂雉りよちを妻に娶りました。勝ち気で有能な呂雉りよちはよく夫を助け、父と共にその偉業に多大な貢献をしました。その結果、劉邦は皇帝即位後も妻に頭が上がりなくなっていたのです。高祖劉邦には戚氏せきしという格別お気に入りにょいの愛妾にょいがいて、二人の間には如意にょいという名の男児もいました。

皇位継承者としては呂后との間にえい盈（後の恵帝）という男児がいて、太子の位についていましたが、盈太子は気の弱い性格であったため、それを口実に劉邦はこれを廃して、如意にょいを太子に据えようとしてしました。一方呂后は、知将の誉れ高い張良の知恵を借りて盈の為に強力な補佐役をつけ、太子廢嫡の大義名分を高祖から奪い取りました。盈は太子として立派に成長したので、高祖はやむなく次の歌を作って戚氏に舞わせ、二人で慰め合うほかありませんでした。

[原詩]

hóng hú gē hàn gāo zǔ
鴻 鵠 歌 漢 高 祖

hóng hú gāo fēi yì jǔ qiān lǐ
鴻 鵠 高 飛 ， 一 舉 千 里
yǔ yì yǐ jiù sì hǎi héng jué
羽 翼 已 就 ， 四 海 橫 絕
sì hǎi héng jué yòu kě nài hé
四 海 橫 絕 ， 又 可 奈 何
suī yǒu zèng jiǎo jiāng ān suǒ shī
雖 有 繒 繳 ， 將 安 所 施

[訓読]

こうこく 一挙に千里
鴻鵠高く飛びて 一挙に千里
うよくすで な しかい おうぜつ
羽翼已に就りて 四海を横絶す
四海を横絶す また いか
 又た奈何んすべき
そうしやく は いずく ほどこ
繒繳有りと雖も 將た安んぞ施す所あらん

[和訳]

か こうこく あまか
彼の鴻鵠は高く飛び 千里の彼方を天翔ける
うよく は
羽翼はすでに備わりて 今や四海に羽ばたけり
今や四海に羽ばたけり さても彼をば如何にせん
たとい ゆみや いと すべ
たとい弓矢の有りとても 射止むる術のなかりしを

（『史記』留侯世家）

高祖の死後、実権を握った呂后は戚氏母子を捉えて残殺しました。戚氏に対しては、手足を切り取り、眼をくりぬき、これを厠じんていに置き「人彘じんてい（ひとぶた）」と名付けた、ということです。

今月のお題は、韓愈(768~824)の『初春の小雨』でした。韓愈は中唐の詩人、思想家、政治家で、中国では知らない人がいないほど有名な人物ですが、日本では同時代に活躍した白居易の方が有名で人気がありました。白居易の詩は平明で庶民的な反面、正統派の詩人からはやや俗っぽいと見られていて、盛唐期の詩風を重んじる『唐詩選』には一首も入っていません。しかし日本では清少納言など宮中のインテリ女性達がこぞって学んで引用したことは前にもご紹介しました。

一方、韓愈は白居易とは両極端の存在でした。思想は儒教中心主義で仏教、道教を厳しく攻撃した硬派の人物でした。「ちょっと硬いところがあるけど、腐敗を許さず、本当に優秀な政治家でした。こんな人が日本の政治家に欲しいですね」と植田先生。誠実で正義感が強いが故に、二度ばかり左遷させられています。かといって世の不条理を憎むあまり開き直って隠遁することもなく、最初の左遷後は刑部侍郎、二度目の左遷後も吏部侍郎という、今でいう政府官庁の次官にまで累進しました。

文章家としては、当時流行していた四六駢儷体という、外面を華麗に飾り立てるばかりで中身の乏しい文章を排して、自分の思想をしっかりと伝える古文体を提唱し、多くの支持を得ました。思想性の高い秦漢時代の文章を模範としたので、これを古文復興運動といいます。

詩の方は理屈っぽく難解なものが多く、必ずしも大衆受けはしませんでした。中には味わい深く、今でも多くの人々に愛誦される作品もあります。

では、そんな韓愈の詩を見てみましょう。

chū chūn xiǎo yǔ hán yù
初 春 小 雨 韓 愈

tiān jiē xiǎo yǔ rùn rú sū,
天 街 小 雨 潤 如 酥,
cǎo sè yáo kàn jìn què wú.
草 色 遥 看 近 却 无。
zuì shì yī nián chūn hǎo chù.
最 是 一 年 春 好 处。
juéshèng yān liǔ mǎn huáng dū.
绝 胜 烟 柳 满 皇 都。

てんがい しょうううるお そ ごと
天街の小雨潤すこと酥の如し。

そうしょくはるか かえ
草色遥に看るも近づけば却って無し

こ ところ
最も是れ一年春の良き処

たえ まさ えんりゅう こうと
絶て勝る煙柳の皇都に満つるに

■一句目

「天街」とは皇帝のお膝下、都の大通りのことです。そこに初めて小雨が降った。つまり、雪ではなく初春の小雨が降ったということですね。その様子が「酥」のようだ、と言っています。酥とはここでは、「酥油」を指し、今でいうバターのことです。バターは遊牧民の生活には欠かせないものですが、漢民族が常食するものではありませんでした。しかし、当時唐の都は世界一の大都市でしたから、異民族の食材も売られていたのでしょう。それはさておき、道が“バターのような”という表現には意表を突かれますね。ちなみに二十四節気では、立春の15日後(新暦2月18日ごろ)を「雨水」といいます。

それまではカチカチに凍っていた地面が解けて、しっとり濡れている様子を想像すると、なるほど、当時はアスファルト舗装ではなく、多くは土の道だったのだから“バターのような”状態と言われるとそうかもしれませんね。雨上がりの水溜りのまわりの黄色っぽい、ぐにゃぐにゃした校

庭の土に、長靴底の足跡をつけるのが楽しかった子供時代を思い出しました。

■二句目

遠くの方から見ると緑の草が見える様な気がして、近づいてよく見ると草はまだ生えていなかった。目の錯覚だったというわけです。

■三句目

春の一番良いところはこれだ。つまり「もうすぐ春が来るぞ」と“期待している心境”こそが最高だ、と言っています。前の句でわざわざ近くまで緑を探しに行った結果、目の錯覚だったことは「残念なこと」ではなく「味わい深いこと」と言っているのです。

■四句目

「絶えて勝る」とは「こちらの方が断然良いに決まっている」ということです。煙柳とは、緑の柳に霞がかかっている風景です。つまり、本格的に春になり、都のあちこちの柳が緑になって、霞がかかっている頃よりも、「もうすぐ春が来るぞ、春が来るぞ、と期待しているこの時こそが一番だ」と言うわけです。

「一見、見たままを表現しているようですが、全くのリアリズムではなく、心の中を描写していますね。このような細やかな心理描写は李白や杜甫の頃にはありませんでした」と植田先生。

今年の冬は、大雪こそは降らなかったけど、東京でも寒い日が多く、今か今かと春を待つ気持ちは皆さんも記憶に新しいことと思います。我が家は受験生がおりましたので、例年以上に春という「一段落がつく時期」が待ち遠しい冬でした。しかし、「待ち侘びている時こそが花なんだよ」と韓愈に言われてみて、初めてそうかな？ と考えてみました。

確かにいざ春が来てしまうと、それはそれで色んなことがスタートする慌ただしい季節を迎えるわけです。昔であれば農耕が始まり、日の出から

日暮れまで、もの思う暇もない繁忙期に突入したわけですから。韓愈の様な高級役人の生活はそうでないにせよ、物事が動き出すと良いこともそうでないことも起こるのが世の常です。

そう思えば、冬眠中の動物のように、春を待ちながらも、息を潜めて停止している時期もそれなりに良きもの、なのかも知れないと思えてきました。ちなみに「雨水」から15日後、その動物たちが動き出すのを「啓蟄(驚蟄)」と言いましたね。

そう考えると、韓愈のいう「春」は季節の春だけでなく、時代でいうと「最盛期」、人の人生でいうと「絶頂期」のことも暗喩しているのかしら、と思えてきました。

最後の一句は、柳の新緑があちこちに見られる活気のある春の風景にあえて「霞」がかかっていると表現しています。

全くの私見であります。人生の絶頂期というのは、違う側面から見れば、ものごとに霞がかかったような、“儂いもの”であるということをお願いしたいのかもしれませんが。

華美な文体を嫌って、外見より中味の重要性を説いた韓愈は、ウハウハ気分の春よりも、地に足を付けて内省できる冬場を好んだのかもしれませんが。まさにこの詩では「真冬でなく、もうすぐ春という晩冬から初春の、ごく短い時期」の良さを際立たせています。

もう一つ、韓愈が初春を詠った絶句があります。

chūn xuě 春 雪

xīn nián dōu wèi yǒu fāng huá
新年都未有芳华，
èr yuè chū jīng jiàn cǎo yá
二月初惊见草芽。
bái xuě què xián chūn sè wǎn
白雪却嫌春色晚，
gù chuān tíng shù zuò fēi huā
故穿庭树作飞花。

すべ ほうか
新年都て未だ芳華あらず
二月初めて驚いて草芽を見る
おそ いと
白雪却って春色の晩きを嫌い
うが ひか な
故に庭樹を穿って飛花と作る

■一句目

新年はどこを見渡しても、きれいな花、芳しい花はない。これは、立春より旧正月の新年が早い場合のことを言っています。暦の関係で、実際の季節より日付が一年に十日ばかりズレるので、何年かに一度春節が早くなることがあるのです。この場合、日付を中心に考えると、春の到来が遅れることとなります。

■二句目

二月になってやっと草が生えてきた。ここで言う「二月」とは、新暦で言えば二月末か三月中旬あたりです。

■三・四句目

白雪が「私の出番が終わったのに花がなかなか来てくれないから…」と言って、花の代わりになって庭木の枝の間に降りかかっている、という情景です。

三句目と四句目は擬人法です。しかも、花の気持ちでなく、雪の気持ちになって語っているところがとてもユーモラスですね。

この表現を見ても、韓愈が今で言うメタ認知力^注の優れた人であったことが分かりますね。頭脳的に優秀ただただでなく、面倒見が良く心優しいので、年齢を問わず幅広く弟子たちに慕われた人物としても知られています。

家庭にあっても模範的な厳父であったようで、教育の重要さを説く、息子に宛てた散文風の古詩があります。この詩から「一龍一猪」という成語が生まれています。

全文は長いので、一部をご紹介します。

~~~~~

两家各生子，提孩巧相如。  
少长聚嬉戏，不殊同队鱼。

年至十二三，头角稍相疏。  
二十渐乖张，清沟映污渠。  
三十骨骼成，乃一龙一猪。

### ●符读书城南

二つの家族に男子が生まれたが、幼少期は似たり寄ったりだった。

少し大きくなると一緒に遊び、魚の群れのようなだった。

十二三歳になると、顔つきにやや差が出てきた。

二十歳で漸く差が際立ってきて、清流とドブ川の違いに見えてきた。

三十歳で一人前の大人になると、一方は龍になり一方は豚になった。

『論語』に「性相近，习相远」（性相近し、習相遠し）という言葉があります。児童向けの古典書『三字経』の冒頭部分にも出てくるので、中国では多くの子供たちが暗記しています。人の天性は誰しも似たり寄ったりですが、その後の教育と習慣によって大きな差が出てくるという意味です。上記の詩は孔子のこの言葉を、実例を挙げて解りやすく解き明かしたものです。

残っている詩や文章から、韓愈という人は常に原理・原則を重んじながらも、家族や友人を大切にし、国家社会を大切に考え、自分の力で出来る限りのことを他者に与え続けた人物であったように思えました。

ややもすると、自分だけの世界に入り込んでしまう芸術家タイプではなく、政治家らしい政治家でありながらも、権力・利害にはまることなく、ものごとをあらゆる角度から客観視出来る、多角的な視点を持った人物だったのでしょう。

注)メタ認知：「客観的な自己」「もうひとりの自分」などと形容されるように、現在進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識することにより、自分自身の認知行動を把握することができる能力である。(Wikipedia より)

上官婉児は、初唐の664年河南省の陝州で生を受けた。陝州はあの当時の地名で、今の河南省・三门峡市と山西省・運城市に跨る地域に設置された州である。別名を上官昭容とも言う。上官という名は、中国では苗字は一字が殆どの中では数少ない複姓である。昭容とは皇帝の側室であるが、その中では高位という。後年、第4代の中宗(656～710年)の側室となったが、その中宗は、第3代皇帝の高宗(628～683年)と則天武后(623～705年)との間に生まれた。武后33歳の時の子である。婉児が宮中に入ったのは奴婢としてであり、それが昭容にまで昇り詰めるのであるから並大抵の人物ではないことが分かるが、追い追い話していくことにしたい。

彼女について語るとき、祖父の上官儀を登場させなければならない。上官儀(608～664年)はやはり河南省人であり、7世紀初頭の政治家であり、詩人である。儀の作る五言詩は〈上官体〉と呼ばれ、時の高官たちに珍重されたという。儀は幼少時に僧侶とされたが、勉学に励み積典に通じ文を善くした。627年19歳で進士に合格するという秀才で、太宗(第2代皇帝・李世民)に召され秘書郎となった。太宗は文を著す度に儀に目を通させたという。高宗の代では秘書少監に昇格した。皇帝の信任は、太宗・高宗と厚かったのだ。ところが思わぬ落とし穴が待ち受けていた。前述のように高宗の皇后は中国三大悪女のひとり則天武后である。次第に政治に介入し彼女の横暴が露になって行った。それを宦官が内部告発したため高宗は儀に相談した。儀は皇帝の

ためと思いこの際、詔を起草して武后を廃そうとしたのである。皇帝の詔の原案を儀が作ったのであるが、これが武後の知るところとなり、深く恨まれることになった。高宗の長男である李忠は最初の皇太子となったが、武后が皇后になると母が劉氏である李忠は皇太子を廃され梁王に降格となり挙句の果てには左遷された地で22歳の若さ

で殺害された。儀は李忠の投獄に連座して讒言により同じく投獄され獄死した。濡れ衣を着せられた儀であるが、家屋、財産はすべて没収となり一族は殆ど殺害された。祖父が獄死した664年に生まれたばかりの婉児は、乳飲み子であったため母の鄭氏と共に奴婢として宮中に住むことを許された。すなわち生まれた時から外の世界を知らず、宮中で生涯過ごすことになった。

時は流れ婉児が14歳の時、彼女に詩文の才があることを風の便りに聞いた武后は婉児に接見し、その能力を測るためにある命題を与えた。するとたちまちのうちに立派な文章を作り上げ

遺憾無く文才を発揮した。武后も大いに感心し、すぐに奴婢から女官に彼女の身分を回復させたのである。間違いなく祖父の血を受け継いだのであろう。677年のことであった。

婉児は生涯武后と陰に陽に関わっていくのであるが、時代背景が複雑であり登場人物も多いため、ここで読者の理解の一助にと思い、武后の一生の中で婉児に関係する主な出来事を別表にまとめた。以下この年表に沿って話を進めて行きたい。

まず683年に高宗が崩御すると、さすがの則天武后も一気に皇帝位を狙わずそれまでと同じよう



上官婉児 (『百美新詠』)  
ウィキペディアより

に実権は持ちながら我が子の<sup>けん</sup>頭を皇帝に就け中宗とした。第4代皇帝である。しかし翌年の684年に武後の怒りに触れ皇帝位を剥奪されてしまう。中宗は2度皇帝になるが、最初の在位期間は100日にも満たなかった。中宗の後は弟である<sup>たん</sup>旦が第5代皇帝・<sup>えいそう</sup>睿宗となった。武後は度重なる強権政治を行いながら甥である<sup>ぶさんし</sup>武三思をはじめ、武氏一族を次々と登用し、一方で李氏一族を排除していった。また周の時代に天子が政務を執ったといわれる<sup>せつかいぎ</sup>明堂という宮殿を後述の怪僧薛懷義を責任者として造営させ、688年に完成させた。さらに周の武王と名が同じことから武王の末裔と勝手に名乗るなど着実に権力基盤を固めて行った。長い中国の歴史上、女帝は前例がないためその難しさは誰よりも知っていたのである。じっくりと皇帝位を狙ったのは、やはり生来の資質が秀でていたのに加え太宗の側室として送った十有余年の経験があったのである。この間、663年には唐・新羅連合軍は、白村江の戦いで百濟・高句麗連合軍を破った。668年には、隋が4度も攻めて都度敗退していた高句麗を滅亡させるなど、唐の国力の充実を内外に見せつけている。そしてついに690年に皇帝に即位して、国号を〈周〉とした。この時、武後は68歳、上官婉児は26歳であった。武後はもうすぐ古稀を迎えようかと言うのに、それから705年で崩御するまで15年間も皇帝の座につき専制政治を実行した。さらに700年には<sup>ちやうえきし</sup>張易之、<sup>ちやうしやうそう</sup>張昌宗兄弟の男妾を抱えるなど精力絶倫ぶりにも目を見張るものがあった。なお、690年には当然第5代皇帝・睿宗は帝位を母親に奪われたが、武後の死後710年、皇帝に2年間復位している。

武後が皇帝に即位してまもなく婉児の身に災難が降りかかった。素性の分からない薛懷義という怪僧を武後は男妾として傍らに置き、一方で李氏一族を追い落とすために利用した。武後と薛の関係は、最初はうまく行っていたが、武後が権威の象徴として建設させた明堂に薛が放火するに至ったため死刑を言い渡した。これについて婉児も責任を追及され死刑を言い渡されることになった。しかし、武後は珍しく仏心を出し、「殺すには惜し

い才能の持ち主である。顔に入れ墨をすることで赦免する」としたのである。実は武後は、婉児の才能を高く評価しており、19歳の時から傍に仕えさせ詔書の起草からあらゆる文書に目を通させてきた。このためいつの日か婉児は力を備え女宰相と呼ばれるようになり武後を支えた。さて婉児への入れ墨の罰であるが、入れ墨師は美貌の婉児に似合うように額の真ん中に紅梅の花びらを入れたとも伝えられている。美人の誉れ高い彼女は一層妖艶さが増し、これが宮中の女官たちの中で〈紅梅装〉という流行の化粧となり競って自分たちの額に紅梅を描かせた。婉児はまた斬新なヘアスタイルを編み出し、これは〈上官髻〉と呼ばれたと伝えられる。690年の出来事であった。中国では映画にもなり、額に花びらを描いた女優が妖艶な演技をしている。

695年、武三思は武后から〈周〉という国の歴史編纂を命じられ、合わせて婉児もその仕事に参画するように命じられた。婉児は三思のために献身的に仕事を続けた。その働きぶりに三思は感激し、婉児に対して深い気持ちを持つに至った。彼女にしてみればこれからの世は武氏の世になると見越して一心に一族に取り入ろうとしたのではなかろうか。そして二人はある資料では深い関係になったと記されている。現代では、眉をひそめる向きもあろうが奴婢から身を起し何の後ろ盾も持たない婉児としては生きるためのやむを得ない選択でもあったのであろう。因みに武後の男妾ということで権力を持ち宮中で我が物顔で行動をした張兄弟とも関係を持ったらしい。

また月日は流れ、流石の武後も老いには勝てず、ついに705年に崩御した。この時ずっと勝手な振る舞いに周囲から憎まれていた張兄弟も殺されている。そしてここで中宗が再び皇帝に返り咲き、婉児も昭容となり彼女の時代がふたたび到来したのである。中宗は、我が母に「則天大聖皇后」の諡号を贈った。これから、世に則天武后と言われるようになったのである。因みに則天とは、次の論語の<sup>たいはくへん</sup>泰伯篇に見える言葉からである《大いなる哉、堯の君たるや。巍巍乎としてただ天を大いなりと

す。ただ堯のみこれに則る》。翌年の706年5月18日に、武后は夫・高宗の眠る乾陵（西安の北西80km）に埋葬された。

唐朝内の権力闘争は一段落したかに見えたが、今度は中宗の皇后である韋皇后が生来の権力欲をみせて来た。自分も武后のように皇帝になれるのでは、と勘違いして、娘の安楽公主の甘言に乗りさらに上官婉児を巻き込んで蠢きだしたのである。中宗は体があまり丈夫ではなく皇帝として国を統括する力量が全くなかったことがこうした動きの背景にあった。婉児はその時々権力者の懐に入っていきなかつたのであろうが、美しく才能あふれる彼女を周りも放っては置かなかつたのであろう。韋皇后は、武后が皇帝の位に就くまでに如何に用意周到に段階を追って来たのかを理解せぬまま、まず夫の中宗を毒殺し帝位篡奪を試みたが周囲には支える勢力が殆どなかつた。そしてついに立ち上がった5代皇帝の子・李隆基により娘共々殺害されてしまう。上官婉児も逮捕され隆基の前に引き出され首を刎ねられてしまったのだ。46年の生涯であつた。隆基はこのあと玄宗皇帝として皇帝となった。彼は婉児を殺しはしたものの彼女の文才は認め、皇帝になってから彼女の作品を集め文集20巻を編んでいる。中宗は度々詩会を開催し、群臣たちは競作に励んだが婉児は彼らの先生格で皆添削を請うたと言われている。なお、『全唐詩』には彼女の詩が32首収められているそう。

今回の上官婉児はこの辺りで筆を置くことになる。2代・太宗から7代・玄宗皇帝まで宮中では権謀術数の渦巻く状態が続いたが、その原因は偏に則天武後の権力欲にあつたと言っても過言ではない。その環境の中にずっと身を置いてきた上官婉児は、初唐の裏面史を飾る重要人物であつたといえよう。

2013年9月11日、西安咸陽国際空港の近くで婉児の墓が発見された。単独で埋葬されており、その状況から、後宮の女性ではなく高級官僚として扱われたと考えられるということを最後に付言しておきたい。

## 則天武后および上官婉児の関連年表

| 西暦  | 出来事                                                                          |
|-----|------------------------------------------------------------------------------|
| 623 | 則天武后誕生                                                                       |
| 637 | 武后14歳の時、太宗（第2代皇帝・598～649年）の側室となる。                                            |
| 649 | 太宗死去、高宗が第3代皇帝になる。武后は道士となり感業寺に入り喪に服す。（高宗は秘かに武后を愛しており、感業寺に行つては二人は逢瀬を重ねた）       |
| 654 | 王皇后を幽閉し、翌年に追い出し自分が皇后となる。                                                     |
| 656 | 高宗と武后との間に顕が生まれる。（後の中宗）                                                       |
| 659 | 太宗の正妻であつた長孫皇后の一族で力を持っていた長孫無忌を自殺させる。                                          |
| 660 | 武後に権力が集中し、この頃から垂簾政治が始まる。                                                     |
| 663 | 白村江の戦い——唐・新羅軍が百済・高句麗軍を打ち破る。                                                  |
| 664 | ①武後の廢后の詔が漏れ、上官儀は怨まれていたがこの年に濡れ衣を着せられ殺害される。<br>②上官婉児誕生。乳飲み子のため命は許され奴婢として宮中に上る。 |
| 668 | 高句麗を見事滅亡させる。（隋が4度も攻めたが失敗していた）                                                |
| 677 | 婉児14歳の時、武後に召見されその文才に高い評価を得た。奴婢の身分を免除される。                                     |
| 683 | 高宗（628～683年）崩御。李顕が第4代皇帝・中宗となる。婉児はこの頃から武後の傍らに仕えあらゆる文書の起草などを行うなど辣腕をふるつた。       |
| 684 | 中宗は武後の怒りにふれ皇位を剥奪され、李旦が第5代皇帝・睿宗となる。（中宗はこの時の在位は100日に満たなかつた）                    |
| 688 | 怪僧・薛懐義（男妾）の指揮で明堂（万象神宮と命名）を建設。薛は李氏一族を次々に滅ぼす。                                  |
| 690 | ①武后ついに皇帝に即位（武后68歳、婉児26歳）。9月9日に周王朝を宣言。<br>②武後の寵愛を失つた薛に関連して婉児は罰を受け、顔に入れ墨を彫られた。 |
| 695 | 武后は甥の武三思に「周」という国の歴史編纂を命じる。婉児は三思のため献身的に協力したため三思は彼女を愛し、情婦という関係になる。             |
| 698 | 狄仁傑の献言があり、李顕は皇太子に復位。                                                         |
| 700 | 武后は、張易之、張昌宗兄弟を男妾として傍らに置く。                                                    |
| 705 | 武后崩御。後ろ盾を失つた張兄弟は殺された。これにより皇太子であつた中宗は復権した。婉児も中宗から昭容にしてもらつた。                   |
| 706 | 武后は夫の眠る乾陵に埋葬される。                                                             |
| 710 | 中宗は韋皇后に毒殺される。韋皇后は、娘の安楽公主と婉児とともに韋皇帝となるべく画策したがついに李隆基（後の玄宗皇帝）にそれぞれ殺された。         |

■参考：気賀澤保規著、「則天武后」（講談社学術文庫、2016）

## 『中原経済区規劃』を読む

文と写真=村上直樹

前回はとくに都市群の名称の中に冀、粵といった省の略称・別称が出てきた。以前から気になっていたのので、『わんりい』の読者にはなじみの『中日辞典』(小学館、1992年)等を頼りに日本語での読み方を含めて一覧表にしてみた(下表 日本語読みは別の可能性もある)。

もともと省の名称に含まれる漢字である場合はともかく、なぜ、こうした略称になったのか。たとえば、河南省が「豫」である理由については河南省人民政府のホームページによると、遙か昔、(河南が位置する)黄河の下中流域には河川が縦横に走っており、森林がうっそうとして、象がたくさん住んでいたため、河南は人が象を引く地のイメージも持たれていた。正にそこから象形文字としての豫が生まれ、それが河南省の略称となった、と説明されている。さらに中国古代の歴史書『尚書』の「禹貢」篇では、当時の中国全体が9つの州に分けられており、その中心に

位置するのが、地理的にはほぼ現在の河南省に当たる豫州であった、とも書かれている。

そう言えば、かなり以前になるが、2006年5月に訪れた鄭州の「河南博物院」には入り口の正面に立ち上がった二頭の象を人が左右両手で支えている金色の像があった(同博物院は5年間の改修工事が終わり、2020年9月24日に再開されたが、ホームページで確認すると、この像は変わりなかった)。また、河南省の地図上の形状は立ち上がった象のようにも見え、実際、現地ではそのようなイラストも見かける。

さてここからは前回に引き続き『中原経済区規劃(2012~2020年)』(以下、単に『規劃』)を読むことにしたい。全体の章立てはすでに示したとおりであるが、まえがきが続く第一章、発展基礎(発展の基礎)では、まず、第1節、発展優勢(発展にとっての優位性)として、中原経済区が持っている以下の特徴を挙げている。

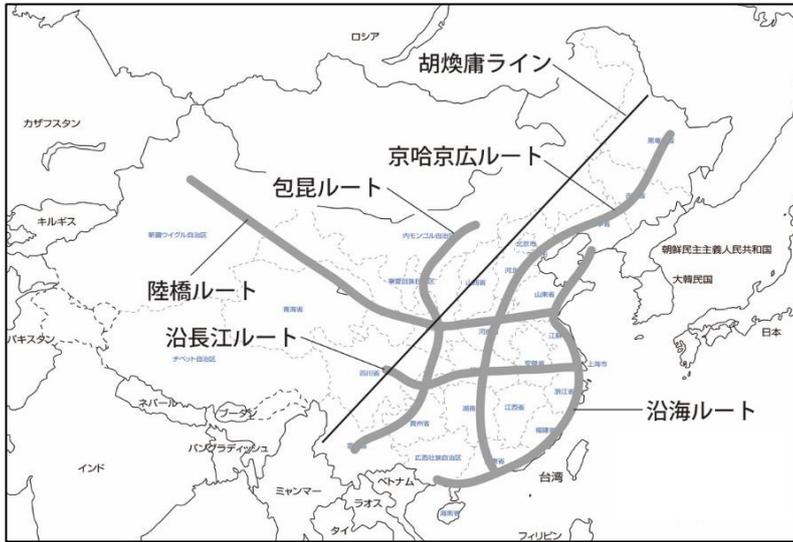
一番目は「交通区位重要」(交通面の位置が重要)である。そこでは、中原経済区が全国「両横三縦」において「陸橋ルート」と「京広ルート」の交差点であると書かれている。この「両横三縦」とは、2011年に決定された第12次五か年計画(『十二五』)の都市化戦略に関する記述を簡潔に表した言葉である。

『十二五』の記述を見ると、都市化推進の理念は「以大帯小」(大を以て小を率いる)であり、大・中・小都市および小城鎮が協調することを目指すとされている。その上で「構建以陸橋通道、沿長江通道為兩条横軸、沿海、京哈京広、包昆通道為三条縦軸」(陸橋ルート、沿長江ルートを以て二本の横軸とし、沿海、京哈京広、包昆ルートを三本の縦軸とするよう構築する)と述べられている。この部分が「両横三縦」に当たり、これらの縦横の軸に沿って、都市化を推進するという意味である。また、これらのルートは、中国が全国的に整備を進めている高速鉄道の各路線にも重なる。次頁の地図は『十二五』に付けられた地図をもとに私が描いたもので、正確さを欠くことはお許し願いたい。作成にはネット無料地図の白地図を一

表 省などの略(別)称一覧

| 省名   | 略(別)称 | 日本語読み | 省名 | 略(別)称 | 日本語読み  |
|------|-------|-------|----|-------|--------|
| 北京   | 京     | きょう   | 湖南 | 湘     | しょう    |
| 天津   | 沽[津]  | こ[しん] | 広東 | 粵     | えつ     |
| 河北   | 冀     | き     | 広西 | 桂     | けい     |
| 山西   | 晋     | しん    | 海南 | 瓊     | けい     |
| 内モンゴ | 内蒙    | うちもう  | 重慶 | 渝     | ゆ      |
| 遼寧   | 遼     | りょう   | 四川 | 蜀[四]  | しょく[し] |
| 吉林   | 吉     | きつ    | 貴州 | 黔[貴]  | けん[き]  |
| 黒龍江  | 黒     | こく    | 雲南 | 滇[雲]  | てん[うん] |
| 上海   | 滬     | こ     | 西藏 | 蔵     | ぞう     |
| 江蘇   | 蘇     | そ     | 陝西 | 陝     | せん     |
| 浙江   | 浙     | せつ    | 甘肅 | 隴     | ろう     |
| 安徽   | 皖     | かん    | 青海 | 青     | せい     |
| 福建   | 閩     | びん    | 寧夏 | 寧     | ねい     |
| 江西   | 贛     | かん    | 新疆 | 新     | しん     |
| 山東   | 魯     | ろ     | 台湾 | 台     | たい     |
| 河南   | 豫     | よ     | 香港 | 港     | こう     |
| 湖北   | 鄂     | がく    | 澳門 | 澳     | おう     |

注) 複数ある場合は[ ]で示した。



両横三縦の位置（『十二五』より）

部改変の上、利用している。なお、『十二五』の地図では、各線上に位置する中原経済区を含む 21 か所の都市群・経済区が記されている。

この地図における太い灰色の線が「両横三縦」である。まず、横線のうち上側（北側）にあるのが「陸橋ルート」である。このルートは高速鉄道としては江蘇省の連雲港から鄭州、西安、蘭州を通過して、新疆ウイグル自治区のウルムチを結ぶ路線を指す。オランダのロッテルダム港へ至る新ユーラシア・ランドブリッジの中国部分であるこの高速鉄道は全長 3,422 キロメートルに及び、今年の 2 月 8 日に開通した。もう一本の下側（南側）の横線が「沿長江ルート」であり、上海から四川省の成都方向に延びている。

一方、3 本の縦の線は、一番右側（東側）が「沿海ルート」であり、その左側（西側）が、「京哈京広ルート」、すなわち、黒竜江省のハルピンから北京を通過して広東省の広州に延びるルートである。『規畫』にはその後半部分の「京広ルート」が出ている。縦の線の内、最も左側（西側）にあるのが「包昆ルート」であり、これは、内モンゴルの包頭と雲南省の昆明を結ぶ線である。

これらの線のうち「陸橋ルート」と「京広ルート」の交点に位置するのが中原経済区であり、鉄道で言うなら鄭州駅である。なお、同じ縦の線「京広ルート」と「沿長江ルート」の交点に当たるのが、鄭州と並ぶ中部地区の中核都市、湖北省の武漢である。

この都市化推進を目指す壮大な「両横三縦」構想は、その後の『十三五』（2016年）、『十四五』（2021

年）でも引き継がれているが、よく見ると地図が微妙に違っている。『十二五』では沿海ルートは大連あたりで終点となっているのに対して、『十三五』ではさらに北に伸び、遼寧省の瀋陽あたりで、京哈京広ルートと合流している。他方、『十四五』では、同じ沿海ルートの南の端が、それまでは広西チワン族自治区の南寧あたりで終わっていたのに対して、北上して重慶まで伸びている。都市化の進展に伴って、縦横の線の区別がはっきりしなくなっている。

ところで、都市化に関わる地図上の線ということでは、人口地理学者・胡煥庸が

1935 年に唱えた「愛輝—騰冲ライン」、その後「胡煥庸ライン」と呼ばれるようになったものが知られている。このラインは雲南省の騰冲と黒竜江省の愛輝（現在の黒河市）を結ぶ直線である。地図では黒の実線で示した。

このラインの東南側は自然環境に恵まれており、平原、河川網等が広がる。一方、西北側の自然環境は厳しく、草原、砂漠、雪域高原の世界である。東南側は中国の国土全体のおよそ 44% を占め、現在、中国大陸の人口の 93% が居住している。2014 年 11 月 27 日に李克強首相が国家博物館の特別展を見学した際、中国の地域発展の課題は、このラインをいかに突破できるか、にかかっていると問題提起をしている（以上は、復旦大学教授の彭希哲氏が 2018 年東京で行った講演の記録を参考にして）。「両横三縦」都市化構想は「胡煥庸ライン」突破と関係しているのかもしれない。

『規畫』における中原経済区の優位性の 2 番目は、穀物を中心に多くの農畜産物で生産量が突出している点である。とくにあげられているのは、小麦（全国の 50% 近く）、綿花（18.4%）、搾油原料（20.5%）、畜産物（14.8%）である。とくに河南省は小麦の大生産地であり、2012 年の生産量は全国の 26.3% を占めている。また、省別生産量の上位 4 省は、河南、山東、河北、安徽であり、いずれも中原経済区に含まれる（ただし、河南省以外は省の一部である）。河南省は搾油原料でも全国の 16.6% を産出し、中でも、落花生は 27.2%、胡麻は 41.9% を占めている。



棗郷善縁芸術館にて（2016年3月）

『規畫』で示された3番目の優位性は、産業の基盤が比較的強固な点である。有望な産業がいくつか挙げられているが、その1つが食品産業であることは農畜産物の一大生産地であることから当然であろう。2020年11月4日付のネットニュース『澎湃新聞』の記事によると、河南省だけで全国の2分の1のソーセージ、3分の1の即席めん、4分の1の饅頭、5分の3の湯圓、10分の7の水餃子を生産しているそうである。この記事は続けて「双匯、三全、思念、好想你等著名食品企業也都来自河南」とある。ここで、「双匯」はソーセージ等肉製品の、「三全」、「思念」はいずれも湯圓、水餃子等の冷凍食品メーカーである。因みに、私が最近、自宅近くの小さな中華食品店で買った冷凍湯圓は「思念」の製品。そして、4番目の「好想你」は棗製品の全国ブランドであり、とくに鄭州土産の定番である。

この「好想你」には思い出がある。河南省への出張には、とくに2015年に日本との直行便が開通して以来、ほぼ鄭州空港（正式名称は鄭州新鄭国際機場）を利用している。この空港は、鄭州市の市街地からやや離れた新鄭市（県級市）にあり、帰りの成田便は朝8:00過ぎと早いため、空港近くに前泊することが多い。よく利用するのは「智選假日酒店」というホテルであるが、このホテルのすぐ隣にあるのが「好想你」の本社工場である。ホテル内にもその棗製品を扱う大きな販売コーナーがある。

2016年3月9日（水曜日）は、かなり早くホテルに着いたので、「好想你」の工場まで行ってみた。正門でとくに誰何されることもなく、工場敷地内に入らんと入っていくと「中華棗文化博物館景区全景図」

とある。

博物館らしき建物は一向に見つからなかったが、さらに行くと、工場建屋の入り口に『棗郷善縁』芸術館と書かれている。小さな案内板によると、枯れた棗の木を使って、弥勒佛、十八羅漢像、観音菩薩、釈迦牟尼像を彫ったとある。さして期待もせず中に入って、びっくり仰天した。ひんやりした空間を長く延びる通路の両側に仏像がぎっしり並んで私1人を見つめている。声まで聞こえてきそうで、思わず、自分のほったをつねりたくなった（写真上）。

実は、今回の「雑感」を書くためインターネットで調べて見たが、2014年6月に書かれた参観記が見つかなかっただけだった。偶然発見した(?)この博物館を、隠れた観光名所としてお勧めしたいところであるが、やはり、わざわざ目指す方は、ぜひ最新情報を確認してからにして欲しい。なお、上記参観記から仏像の数は8700体以上もあったことがわかった。

農産物加工として、もう1つ紹介したいのは、開封名物・麻辣花生である。これは、落花生を使ったスナック菓子でブランド名は「興盛徳」である。外装袋に書かれているように「麻—辣—咸—甜—香—五味俱全」(「山椒の辛さ—唐辛子の辛さ—塩辛さ—甘さ—香ばしさ—5つの味がそろっている」)。少々辛い、一度口にしたら病みつきになる美味しさである。中国国内でも人気で、私も開封に出張すると必ず、自分用とお土産用に買い求めていた。コロナ禍で現地へ行くことができない中、日本には無いだろうと諦めていたところ、日本在住の中国人の友人が越境EC(海外通販)を使って直接取り寄せてくれた。いかにも便利な世の中になったものである。(以下、つづく)

## 「秦皇島」をご存知ですか？……(5)

文と写真 吉光 清

山海関地域では、孟姜女が始皇帝に海辺で祭祀を行うように条件を出し、その終了後に海に身を投げた後に現れた岩礁を「孟姜女の墓」と言い伝えてきた。この伝説と「秦皇求仙入海处」伝説の存在を以て、始皇帝が“秦皇島”にやって来た証拠とするのは乱暴に過ぎよう。当時は名も無い小島に始皇帝が遙々とやってきた痕跡はあるのだろうか？

『史記』には、始皇帝がBC221年に全国統一を成し遂げた翌年に第一次巡幸を行い、BC210年に巡幸途中で死亡するまでの在位11年の間に、5度の巡幸を重ねたことが記録されている。首都と定めた「咸陽」から遠隔の地に赴くためには相応の支度と時間を要した筈である。大勢の兵士を伴わなければならないだろうし、皇帝の宿泊地は何処でも良いという訳にはいかない。それらを可能にしたのが「馳道」と「離宮」であり、むしろ、巡幸を機会として、それらの整備を進めたとも考えられる。馳道とは、中央が皇帝専用の「御道」、その両側に「緑化帯」と「傍道」を備え、合計した幅員は67.5メートルになった、言わば「古代の高速道路」であった。咸陽から北へは「秦直道」、東北方向に「上郡道」、山東半島に向けて「東方道」、東南に向けて「濱海道」、南東に向けて「武关道」、南西に向けて「秦棧道」、西域に向かって「西方道」のように、咸陽を中心に放射状に、直線的に建設され、「すべての道は咸陽に通ず」の観を呈した。「離宮」についてはBC212年に「関中計るに宮は三百、関外は四百余」と記述があり、後の時代には、始皇帝の傲慢さと浪費の象徴として語られた。しかし、それ



巡幸用の4頭立て馬車（2018年秦始皇帝陵博物院で撮影）

らの離宮は戦国時代の旧六国の地域と咸陽を馳道で結ぶため、旧君主の離宮を利用しつつ、馳道の中継点や終点に置かれた拠点であり、兵力を駐屯させ、王朝の支配を強固にするためのインフラ整備だったと思える。

「徐福」なり「盧生」の出航を見送るためだけに、始皇帝が馬車に乗り（左の写真参照）、大勢の兵士と家来を従え、渤海沿岸の小島まで来る筈は無い。そう考えると、巡幸の途中で、始皇帝が“秦皇島”に立ち寄ることが出来たかどうかが焦点となる。

### ■始皇帝の天下巡幸と刻石

『史記』には5度の巡幸の行程、各地で行った祭祀、始皇帝の徳と功績を讃える「頌徳紀功碑」（刻石）の建設や途中で起こった出来事が記録されている。

BC220年の第一次巡幸は咸陽を出発し、甘粛省の隴西（甘粛省の東南部）から北地（慶陽市寧県）を巡って咸陽に戻った。これらは「秦」が興った土地であり、祖先を祀り、王朝樹立を報告し加護を感謝することが目的であったとされる。また、この年に「馳道」や「離宮」の建設を始めたことも記されている。

BC219年の第二次巡幸は長旅となり、『史記』にも多くの事が記されている。東方の山東半島を目指し、「嶧山」の頂上に一番目の刻石を建て、「泰山」で「封禪の儀」を執り行い、二番目の刻石を建てた。その後、山東半島の「琅邪」では三箇月も逗留して離宮と三番目の刻石を残した。湖南省と湖北省を巡り、陝西省の武漢を経由して咸陽に戻った。『史記』における記述順序から、徐福が始皇帝に上奏し、渡航を許されたのは琅邪台の離宮においてだったと考えられる。

BC218年の第三次巡幸は東方に向かったが、河南省陽武県に至って、盗賊騒ぎで10日間も大捜索を行ったことが記されている。「芝罘山」に登り、四番目の刻石を建て、続いて、五番目の刻石を建てた後、琅邪台に入り、山西省「上党」を経て咸陽に戻った。

BC215年の第四次巡幸は「燕国」地域を対象として行われたが、行程については、咸陽—「碣石」（秦皇島市昌黎県）—「上郡」（陝西省北部）—咸陽としか記されていないが、使命を果たせず帰って来た盧生

が偽の預言書を示し、信じた始皇帝が匈奴を攻撃する件も「秦皇求仙入海处」伝説と符合している。「碣石門」に六番目の刻石を建てたが、その後失われた碑文の全文が『史記』には残されている。

BC210年の第五次巡幸は咸陽から湖北省—安徽省—江蘇省—浙江省—江蘇省—山東省を巡った大規模なものであった。浙江省の「会稽」で七番目の刻石を建てたが、「沙丘」（河北省邢台市）の離宮で死亡するに至り、亡骸は咸陽に戻ったが、その遺勅は実現されなかったことを歴史が示している。

### ■始皇帝が訪れた“碣石”とは？

『史記』の記述に沿って、始皇帝の巡幸経路と「徐福」と「盧生」の出航とを照合すると、BC219年に徐福が始皇帝に上奏して出航を願い出たのは黄海に面した琅邪台の離宮と考えられ、徐福が渤海沿岸から出航したとすれば、始皇帝がそこに赴いて見送ることはありそうもない。BC215年の盧生の場合は、『史記』解説書に拠れば、始皇帝は秦皇島市昌黎県の「碣石山」まで来ており、出航を見届けるために足を延ばすことはあり得たと考えられる。ただし、『史記』には、行程について“碣石”とのみ、記されている。

中国古代史の研究者の考証に拠れば、“碣石”とは元来、岩礁の意味だったので、内陸にある碣石山が秦漢時代の「碣石」ではないという。「孟姜女の墓」とされてきた山海関の岩礁を望む対岸地域は、古くから「碣石」と呼ばれ、離宮を置くべき重要地点だったという。また、二つ並んだ岩礁は門の様相を呈したので「碣石門」と呼ばれたという。前漢の武帝に随行した司馬遷がそこに刻まれた碑文を実見して、『史記』に記録したのである。「碣石」が岩礁であったことが



「百度地図」上に重ねた古い絵図面の「东山」「南山」

いつしか忘れ去られ、北魏時代以降の皇帝たちは内陸部の碣石山に巡幸することになったという。

山海関からならば“秦皇島”となる小島は目と鼻の先にあり、始皇帝が自ら盧生の出航を見送ったという話も現実味を帯びて来る。また、咸陽から、何処を経由して、「碣石」にやって来たのかは記されていないが、山東地域を経由しなかったならば、遼東半島へ向かう馳道である「上郡道」を利用してから南下して来たことが考えられよう。

### ■“かつての秦皇島”は「今、何処？」

宿題の解答を探して「百度」を検索し、「秦皇島」の名的起源地指今海港区东山，这是一座由风化花岗岩组成的剥蚀性残山、海拔20余米、方円不足平方公里との説明文を見つけた。しかし、いくら地図を調べても「东山」は見つからない。筆者の参加する「中国語入門講座」の郁先生に相談したら、以下の文章を見つけていただいた。「今天与陆地连在一起的东山，在200多年前，还是一座名副其实的岛屿，真到19世纪末，随着港口的建设，岛屿才与陆地相连，成为大陆的一部分」。19世紀末の秦皇島港の建設工事で島は陸地の一部になったという。それでも、場所を特定したいと思い、秦皇島市在住の知人を通じて、複数の「秦皇島人」に东山について訊いてもらった。しかし、「そのような山は知らない」という返事しか戻って来なかったという。そこで更に「东山」の場所を特定できるような資料を探してもらい、見つかった絵図面を現在の地形に少しずつ貼り合わせてみた。（左の図参照）。陸地と繋がった後も「东山」と「南山（秦皇島の一部？）」が島の名残を留めている。少し下に見ると、沿岸道路のラインは「入海处景区」西側の境界線に酷似する。「东山街」「南山街」との関連も良く分かる。後に山を削り、浅瀬を埋め立て、海岸地帯に景区を建設したのであろう。納得である。

「孟姜女廟」と「秦皇求仙入海处」が気になって、日本に戻ってから調べ、分かったことを報告させていただいた。最後には何と、「山海関」に話が戻って来たことには驚いた。次回から、肝心の「秦皇島市」の観光案内に戻ることにしたい。（続く）

### ■参考資料：

吉田賢抗：『新釈漢文大系、史記本紀2』，明治書院，1973  
鶴間和幸：「秦始皇帝長城伝説とその舞台」，インターネット（2021.4.1 閲覧）

1992年に「小学館」から発行された、北京・商務印書館との共同編集による「中日辞典」には、103項目の「囲み記事」なるものが載っています。「囲み記事」とは、ある言葉について、総合的に・詳細に説明したものです。

今回は、この中から【多音字 duōyīnzì: 多音字】を取り上げようと思います。中国語の漢字は、原則として1字1音ですが、二つ以上の発音をもつ字もあり、これを“多音字”といいます。現代語にみられる“多音字”は、いくつかの種類に分けられます。

- 意味や品詞の違いを発音によって区別したもの
- 専門用語など、習慣上、特殊な発音をするもの
- 故事成語など昔から現在まで使われている言葉では、「書き言葉」の発音が残っている一方、それとは異なる「話し言葉」の発音があるもの
- 姓名や地名など専用の特殊な発音をもつものなど

手元にある「彩图学生多音字有声字典」(2020年7月号: 255号に紹介済み)には、「本書には345個の小学生が比較的良く用いる多音字を載せている」とあります。この中から、いくつか紹介したいと思います。

私が最も気に入っている“多音字”はこれです。

## 【吐: tǔ/tù】声調の使い分けの基準がユニーク

第三声の“tǔ”、第四声の“tù”、どちらも「口の中のものを吐き出す」意味ですが、「つばを吐く・タンを吐く」などの自制可能な動作のときは“tǔ”を用い、「血を吐く・泥酔して飲食したものを吐く」などの自制不可能な動作のときは“tù”を用います。「心の中にあるものを吐く」ことは自制可能な動作ですから、これも第三声の“tǔ”。これを記憶しておくための例文: 玲玲有个毛病, 看见别人吐痰便想呕吐(Líng líng yǒu ge máobing, kàn jiàn bié ren tǔ tǎn biàn xiǎng ǒu tù) レイちゃんは誰かがタンを吐くのを見ると吐き気を催すクセがある

“多音字”の中には、ある語のときだけ特別な声調を使うというものが、比較的多くあります。ここでは、2つの漢字を挙げておきましょう。

## 【同: tóng/tòng】ある語だけは特別扱い①

この字はほとんどの場合、第二声の“tóng”ですが、ある語の場合にのみ第四声の“tòng”になります。それは“胡同 hú tòng(路地・小路・横町の意味)”。この語、もとはモンゴル語の「路地」を意味する語の音に漢字を当てはめたもの。そのため第四声の音が残ったのでしよう。さらに、「何々路地」のように固有名詞になる場

合は“某某胡同 mǒu mǒu hùtong”というように轻声で発音します。これを記憶しておくための例文: 昨天, 我在叫金鱼胡同的死胡同遇见了张立同学(Zuó tiān ,wǒ zài jiào Jīn yú hùtong de sǐ hú tòng yù jiàn le Zhāng Lì tóng xué) きのう僕はジンイー路地という袋小路でクラスメートのチャンリーに出会った

## 【节: jiē/jié】ある語だけは特別扱い②

この字はほとんどの場合、第二声の“jiē”ですが、ある語の場合にのみ第一声の“jié”になります。それは“节骨眼 jiē gu yǎn(〈方〉肝心な時の意味)”と“节子 jié zǐ(木のこぶの意味)”。これを記憶しておくための例文: 在小林就要上台表演节目的节骨眼上, 剧场停电了(Zài Xǐ à o Lín jiù yào shàng tái biǎ o yǎ n jié mù de jiē gu yǎ n shang, jù chǎ ng tíng diàn le) リンさんがまもなく舞台上がってプログラムを演じようとしたその肝心な時に、劇場は停電になった

珍しいことですが、日本語の漢字とも共通する特徴を持った“多音字”があります。

## 【臭: chòu/xiù】日本語の漢字と類似

日本語で「臭い」を、「くさい」と読めば悪臭、「におい」と読めば良いにおいも悪いにおいも指しますが、中国語でも“chòu”と発音すれば悪臭、“xiù”と発音すれば単に「におい」を指します。“乳臭 rǔ xiù: 乳臭さ”は嫌なにおいではありませんが、俗に“rǔ chòu”とも発音するのだそうです。いささか下品な文で申し訳ありませんが、これを記憶しておくための例文: 乳臭未干的小毛孩子就摆起臭架子来了(Rǔ xiù wèi gān de xiǎ o máo háizi jiù bǎ i qǐ chòu jiǎzi lái le) 乳臭さがまだ抜けない、毛の生えていないガキが、もう鼻持ちならない態度を吹かし始めた

“多音字”の中で、ある見方でのトップ・ワンといえるものを3つ挙げます。

## 【和: hé/hè/hú/huó/huò】驚異の5音、単独トップ

この漢字は、中国語の漢字の中で最も多くの音を持っています。多くの場合、“hé”と発音しますが、それ以外は以下のとおり。“hè”: 歌に和する、唱和・付和雷同の和。“hú”: マージャンなどで上がること、上がった時に言う言葉は“和了 hú le”。“huó”: 小麦粉や泥などをこねる。“huò”: 小麦粉に水を加えてこねたり、片栗粉に砂糖を加えて混ぜたりする。これを記憶しておくための例文: 小明和小华和泥做土坯, 小明说水少了, 小华随声附和, 结果和弄了半天也没和好(Xiǎ o Míng hé Xiǎ o Huá huó ní zuò tǔ pī, Xiǎ o Míng shuō shuǐ

shǎo le , Xi ā o Huá suǐ shēng fù hē , jié gu ō huō nòng le bàn tiān yě méi huó h ā o )ミンちゃんとフアちゃんが泥をこねて日干しレンガを作っていたが、ミンちゃんが水が少なくなったと言うとフアちゃんがこれに同調し、その結果、長い間かき回していたがうまくこねることができなかった

**【又：chā / chá / ch ā / chà】 四声の音が揃っている漢字**

四声の音が揃っている漢字は、もう一つ“啊 ā /á/ ā /à ”という感嘆詞があります。声調によって異なる感情を表しますが、ここではスルーしておきます。“又”の字で最も一般的な発音は第一声の“chā”で、意味は「フォーク状のもの・フォーク状のものでつく」です。また、バツ印(✖)は“chā”と発音します。それ以外は以下のとおり。“chá”：〈方〉ふさがる・つまる・動きがとれなくなる。“ch ā”：股を開く・広げる。“chà”：“劈又 p ī chà”という語にのみ用い、その意味は「軽業などで、両足を左右・前後一直線に広げて床に座るわざ」のこと。これを記憶しておくための例文：

①用刀又吃饭很不方便，不小心骨头就会又在喉咙里 (Yòng dāo chā chī fàn hěn bù fāng biàn, bù xi ā o xīn g ū tou jiù huì chā zài hóu long li) ナイフとフォークで食べるのは好ましくない、気を付けないと小骨がのどに刺さってしまう

①又着腿和劈又是两个概念(Ch ā zhe tu ĩ hé p ī chà shì li ā ng ge gài niàn) 股を広げる“又着腿 ch ā zhe tu ĩ”と軽業の“劈又 p ī chà”は別物だ

**【差：chā / chà / chāi/ cī】 多彩な4つの音を持つ漢字**

この漢字は中国語学習の早い時期に、“差別 chā bié : 違い・区別・格差”や“差不多 chā bu duō : ほとんど同じ”や“出差 chū chāi : 出張する”などの語に出会うため、最初に“多音字”を認識した漢字だという人も多いでしょう。4つ目の“cī”は“参差 cēn cī”という語にのみ用いられ、その意味は「長短・高低・大小がまちまちである」です。これを記憶しておくための例文： 这班学生的水平参差不齐，考试成绩差距很大，老师给班干部找个差事，把成绩差的同学组织起来，统一补课(Zhè bān xué shēng de shu ĩ píng cēn cī bù qí, k ā o shī chéng jì chā jù hěn dà, lǎ o shī gěi bān gǎn bù zh ā o ge chāishì, b ā chéngjì chàde tóng xué z ū zhī q ĩ lái, t ō ng yī b ū kè) このクラスの生徒のレベルはまちまちで、テストの成績の差が大きいので、先生はクラス委員に使い走りさせ、成績の悪い生徒を集め補習を行った

「これが“多音字”だったとは意外だ」と思うようなものを2つ挙げます。

**【间：jiān/jiàn】 意外、これが“多音字”?! ①**

“时间 shí jiān : 時間、房间 fáng jiān : 部屋”など「時間・空間」を表す場合は第一声の“jiān”、“间接 jiàn

jiē : 間接的な、离间 lí jiàn : 離間する”など「隙間」を表す場合は第四声の“jiàn”を用います。これを記憶しておくための例文： 车间的老王和小赵是亲密无间的师徒俩(Chē jiān de Lǎ o Wáng hé Xi ā o Zhào shī qīn mī wú jiàn de shī tú li ā ) 生産現場のワンさんとチャオ君は、極めて仲睦まじい師弟の間柄である

**【鲜：xiān / xi ā n】 意外、これが“多音字”?! ②**

“新鲜 xīn xiān : 新鮮である、鲜艳 xiān yàn : あでやかで美しい”など「新しい・鮮やかである」ことを表す場合は第一声の“xiān”、“鲜见 xiǎn jiàn : まれである、鲜有 xi ā n y ō u : めったにない”など「少ない」ことを表す場合は第三声の“xi ā n”を用います。これを記憶しておくための例文： 铁树开花真是鲜见，花还这样鲜艳!(Tiě shù kāi huā zhēn shì xi ā n jiàn, huā hái zhèyàng xiān yàn!) ソテツに花が咲くのは本当にまれであるうえに、その花がこんなにもあでやかで美しいとは！

最後に、動詞用法と名詞用法とで声調が異なる“多音字”を挙げておきましょう。

**【担：dān/dàn】** 第一声の“dān”は動詞用法で「(肩で)かつぐ・になう」、第四声の“dàn”は名詞用法で「てんびん棒・責任」、「担起重担 dān q ĩ zhòng dàn」で「重責をになう」です。ちなみに、四川料理のタンタンメンは“担担面 dān dān miàn”、“担子 dān zi(てんびん棒)”でかついで売り歩いたことから、この名がついたそうです。

**【钉：dīng / dìng】** 第一声の“dīng”は名詞用法で「くぎ」、第四声の“dìng”は動詞用法で「(くぎを)打つ」、「钉钉子 dīng dīng zi」で「くぎを打つ」です。

**【扇：shān / shàn】** 第一声の“shān”は動詞用法で「(扇子やうちわで)あおぐ」、第四声の“shàn”は名詞用法で「うちわ・扇子」、「扇扇子 shān shànzi」で「うちわ・扇子であおぐ」です。

**【数：sh ŭ / shù】** 第三声の“sh ŭ”は動詞用法で「数える」、第四声の“shù”は名詞用法で「数」、「数数儿 sh ŭ shù」で「数を数える」です。

**【瓦：wǎ / wà】** 第三声の“wǎ”は名詞用法で「瓦：かわら」、第四声の“wà”は動詞用法で「(瓦を)ふく」、「瓦瓦 wǎ wǎ」で「瓦をふく」です。

**【种：zh ō ng / zhòng】** 第三声の“zh ō ng”は名詞用法で「たね・種子」、第四声の“zhòng”は動詞用法で「(たねを)まく：植える」、「种稻种 zhòng dào zh ō ng」で「イネの種をまく」です。

ところで、日本語の漢字で、読み方が一番多い字は何か知っていますか。それは、「生」だと思えます。「生活：せいかつ」、「一生：いっしょう」、「殖生：はにゅう」、「弥生：やよい」、「生もの：なまもの」、「生まれる：うまれる」、「生きる：いきる」、「生える：はえる」、「生憎：あいにく」、「生業：なりわい」、「生そば：きそば」など。

最初に・・・

6月号と7月号に中国の主として黒竜江省に居住している少数民族の民話をご紹介します。紹介して下さるのは、大連で生まれ終戦後内地に引き揚げ、大連では小学校と女学校を一緒に卒業された一瀬さんと大槻さんという方である(文末に略歴を紹介)。お二人が旅行先で中国語で書かれた民話を偶然入手され、それを一緒に翻訳されたものである。6月号に掲載の「きつねむすめ(めぎつね)」は、鄂温克族(エヴェンキ族・ツングース系)に伝わる民話である。この民族は黒竜江省と内モンゴル自治区に居住しており、人口は2010年調べで3万人余りである。

では、これからお二人の翻訳文をご覧ください。

### ●きつねむすめ(めぎつね)

谷間に川が流れています。川岸の「仙人柱」という小屋に一人の若い狩人が住んでいました。彼は、昼間は山で鹿などの野生動物を捕まえては、その肉を食べ皮を着て生活をしていました。

ある日彼が狩りをしていると、悪い狼が狐をいじめているのを見かけました。狼は狐に咬みつこうとしています。彼は素早く一本の矢を放って狼を撃ちました。狐は危ないところを助けられ、そっと狩人に頭を下げ立ち去って行きました。若者もそのまま小屋に戻って行き、狐がこっそり後を追ってきて彼の小屋には入らず立ち去って行ったことに気づきませんでした。次の日、若者はまたいつものように狩りに出かけました。彼の留守を見届けて、狐は「仙人柱」に忍び込み、くるっと一回転すると美しい娘に変身しました。娘は小屋を綺麗に掃除し、火を焚いて鍋をかけ、美味しい肉料理を作りました。そして彼女は



鄂温克族[è wēn kè zú] (百度百科より)

またくりりと回転して元の狐の姿に戻り、立ち去って行きました。若い狩人は一日中山の中を駆け回って野獣を追い、獲物を背負って帰って来ました。山小屋に帰り着くと中はとても綺麗になっていて、つるした鍋には肉が美味しく煮え湯気が盛んに立ち上がっています。彼は不思議に思いましたが、お腹が空いていたので誰の仕業か考えるより先にまず食べ始めました。

一日、二日・・・こうして十日が過ぎて行きました。娘の姿をした狐は若い狩人のために毎日小屋でご馳走を作り、皮をなめし、狩人が取って帰った獲物の肉を川辺の小さな木の枝にいっぱい干して干し肉を作りました。

ある日、狐娘は狩人の寝床に横たわると、ぐっすり眠ってしまいました。そこへ若い狩人がいつもより早く帰って来ました。山小屋に入るとそばにあった狐の皮が目にとまりそれを取り上げました。これはどうも自分が捕って来たものとは違うようです。でも、この皮はどこかで見たような気がする。彼は自分の寝間に行ってみました。すると、おや?どこからこんな美しい娘が来て自分の寝床で寝ているんだろう?美しい娘はぐっすり眠っています。若者は彼女を驚かせないようにと、

娘の寝姿を眺めながら考えました。この溪谷のあたりは百里に一軒の人家も無い。はて、どこから来た娘なのだろう?同時に彼はこの数日、毎日山小屋を掃除し、肉を煮、皮をなめし、干し肉を作っていたのは誰だろう?とも考えました。これはきっと娘に化けた狐の仕業に違いない。そこで彼は手に抱えていた狐の皮を隠してしまいました。その音に驚いた娘が目を覚めました。娘は起きると慌てて自分の皮を探しま

したがありません。若者が、「お嬢さん、貴女は何を探しているのですか？」と声を掛けました。

娘は、「私が持ってきた狐の皮が無いのです。もしご存知でしたら早く私に返してください」

若い狩人は、「ではお聞きします。いつも私の山小屋を掃除し、肉を煮、皮をなめし、そして干し肉を作ってくださいしたのは貴女ですね？」狐娘は微笑んでうなずきました。

狩人は、嬉しさを隠そうとせず、「じゃ、貴女は私と一緒に暮らしたい・・・？」娘は、若い狩人を見てほほを染めました。が、答えようとしません。若者は娘の心を見通して彼女に、「望んでも望まなくても、私は貴女と一緒に暮らしたい・・・！」とせまりました。

娘は、「貴方は正直な良い方だと思います。まじめで有能。また狩りも上手。その上一人暮らし。私は貴方が好きです。貴方と一緒に過ごしたい」「それじゃ、あの皮を探してどうするの？」「私は貴方に嫌と言われるのが恥ずかしかったのです」「私はとうに望んでいました。貴女が誰なのか分からず、申し入れる方法がなかったのですよ。今日は良いお日和だ。私たち結婚しよう！」「はい、貴方の言われる通りに今日結婚しましょう」

狐娘と若い狩人は結婚しました。狐娘は非常に有能で、若者は狩りをし、二人の日々は益々楽しいものになりました。

彼ら二人は結婚後五年間に十人の息子に恵まれました。息子たちはそれぞれ皆賢く、人々に好かれました。ある者は弓矢を好み、ある者は土を掘ることを好み、ある者は木を好み、ある者は鹿を育てることに興味を持ちました。つまりそれぞれ皆自分の目指すところがあったのです。十人の息子は成長し、長男、次男、三男は山を下りて農業を学び、四男、五男、六男、七男は草原で放牧に携わり、八男、九男、十男は山に留まって狩りを専門とし、鹿を飼育しました。

伝え聞くところによれば、エヴェンキ族はこのようにしてそれぞれに分業し、子孫を残してきたのだと言われています。

## ◆ お二人の略歴 ◆

### ■一瀬靖子（いちのせ・のぶこ）

1929年大連生まれ。大連静浦小学校6回生、大連弥生女学校21回生。昭和21年(1946年)卒業。

敗戦により昭和22年2月、18歳の時リュック一つで初めて見る祖国へ引き揚げました。銀世界の舞鶴に上陸。日本でのゼロからの出発です。二十代は家の為に非開放性結核にも負けず、米陸軍病院、次いでローンテニスクラブなどで働き続けました。大家族を切り盛りした中年時代は、兎に角前を見て一所懸命のうちに歳月が過ぎ去りました。今、子供たちに守られ、何よりもの友人達の温かさに包まれ九十歳を越えたごく普通の年寄りです。すべてに感謝して生きて行きたいと存じます。

### ■大槻一枝（おおつき・かずえ）

1929年大連生まれ。大連静浦小学校6回生、大連弥生女学校21回生。昭和21年(1946年)卒業

終戦の年、私ども一家は父親の仕事の関係で煙台の共産党政府に呼ばれ、中国における昆布、若布などの養殖に従事させられました。折しも内戦（共産党と国民党の）状態であった中国で山東省を転々とさせられましたが、やがて内戦が治まり私は養殖場で父の仕事の手伝いをさせられました。1966年から始まった文化大革命は、全くひどい毎日でした。1973年文化大革命一応治まった時点で帰国のめどがつき、当年8月1日、日本へ帰国。貿易会社に就職させていただき、2001年定年を迎え、今年で20年になります。“終わりよければすべてよし”。でもコロナにだけは邪魔されたくありませんね。



左が大槻さん-右が一瀬さん

読者から2通のお便りをいただきました。偶然にも、2通共、顧傑さんの「中国の面白い神話物語・伝奇物語(6)」を読んでいたものでした。

~~~~~

顧傑さん、いつも楽しみに読んでいます。5月号の物語紹介の結末に、私ならどうするだろう? と考えたそうですが、どの点を考えられたのですか?

殺し屋に対する評価だとしたら、僕なら躊躇なく、李勉の説に賛成します。

命の恩人を救う「人としての一線を守る」か殺し屋として「仕事のルールを守らない人殺し」への擁護の二者択一、迷う余地はないと思います。

中国では、「救人一命胜造七级浮屠」(命を助ければ徳を積んで極楽へ行く) というではありませんか?

後藤 芳昭

~~~~~

わんりい5月号の「中国の面白い神話物語・伝奇物語」を面白く読みました。「受けた恩を返せないから恩人を殺してしまおう」という発想は、昔から中国の文化を手本にして来た日本ですが、さすがに見習えなかったようで、日本ではあまり聞いたことがありません。

顧傑さんは、「実は歴史上に似たような話はよくあります」と書いておられます。機会があったら、そのお話もしていただきたいと思います。 鶴川 万里子

**会則同封のお知らせ**

わんりいは1992年8月に誕生し、その時に会則を制定し、それに則り活動をしてきました。活動内容の多様化に伴い数度の改正を行いましたが、これまで会員全員に会則をお届けしていません。このため入退会の手続き、会費の取り扱い、わんりいの活動を話しあう場である月一度の定例会の運営が如何になされているか等、ご承知の方は少ないのではと思います。そこで世話役一同としましては、コロナ禍が収束しましたら、どなたにも気軽に諸活動に大いに参

加していただきたく、このたび全員に会則をお配りすることといたしました。会員の皆様におかれましては是非会則をご一読くださり、わんりいの活動により一層のご支援を賜りたく存じます。なお、お気づきの点がありましたら、本誌表紙に記載していただき、代表:寺西宛にご連絡を頂きたく、お願い申し上げます。

**わんりい 2020 年度会計報告**

2020年4月~2021年3月 (単位:円)

|                                          |                                             |
|------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 前年度繰越金                                   | 80,661                                      |
| 当年度収入                                    | 162,332<br>(会費、寄付金等)                        |
| 当年度支出<br>(内訳) ①会報印刷・発送費<br>②HP維持費<br>③雑費 | 178,859<br>(163,139)<br>(13,500)<br>(2,220) |
| 次年度繰越金                                   | 64,134                                      |

毎年、収入には皆さま約80名の会費、有志からのご寄付のほか、地域の活動における物品の販売、料理講習会などからの収益が加わりますが、本年度は新型コロナウイルスによる活動休止の影響でその分の収入は0になり、単年度収支は赤字になりました。

従前の活動が出来ますように、新型コロナウイルスの一日も早い退散を祈っています。

**◇満柏画伯の漢訳俳句◇**

毎月四字成語に挿絵を描いてくださる満柏画伯は、趣味で日本の有名な俳句を中国語に訳しておられます。

‘わんりい’誌上では、毎月その中から季節に合った俳句を1句ずつご紹介します。

~~~~~

五月雨を 集めて早し 最上川(芭蕉)

**五月细雨汇湍流
奔腾直下最上川**

【わんりいの催し】

皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：6月15日(火) 13:00~14:30
7月15日(火) 10:00~11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

### \*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館
- 日時：6月27日(日) 視聴覚室  
10:00~11:30  
7月25日(日) 学習室3・4  
10:00~11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)  
Email:ukiuki65.jpjp@yahoo.co.jp  
(有為楠)

☆東京都に発出された緊急事態宣言のため、5月の上記催しは、2件とも休止となりました。

#### ■ 6月・7月定例会 代表宅

- ▼ 6月8日(火) 13:30~
- ▼ 7月8日(木) 13:30~

#### ■ 'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼ 7月号の発送  
7月1日(木) 10:00~
- ▼ 8月は休刊

## ☆ 編集後記 ☆

最近はお天気の話をする時、必ずと言っていいほど、「観測史上初」とか「例年になく～」とかの形容句がついて回ります。

今年の「梅雨」もその例にもれず、「観測史上一番早い梅雨入り」を迎えました。関東地方はまだこれからですが、5月の中旬に梅雨の声を聞くと驚きです。

一昔前までは、梅雨入りは6月10日前後、梅雨明けは7月20日頃という認識で、これより10日もズレると、今年の梅雨入りは遅いの、梅雨明けは早いのと、新聞に大きく取り上げられたものでした。

「昔は良かった」などと年寄り臭いことは言いたくありませんが、四季が行儀よく並んで、折々に自然の移ろいを感じる事が出来る、美しい日本には心惹かれます。再び巡り合うことはもう出来ないのでしょうか？

~~~~~

'わんりい'は、新入会をいつでも歓迎します。

年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費1000円。

■ 問合せ：044-986-4195 (寺西)

'わんりい' 264号の主な目次

寺子屋・四字成語(43) 火中取栗	2
「日译诗词」(13) 劉邦『大風之歌』『鴻鵠之歌』...	3
「漢詩の会」だより(48) 韓愈『初春の小雨』.....	4
中国の歴史を彩る美人百花(8)	7
「中原」雑感(13)『中原経済区』	10
秦皇島をご存知ですか(5)	13
「中日辞典」からの意外な発見(6)	15
中国・少数民族の民話(1)	17
みんなの広場	19
'わんりい'の催し・お知らせ	20